

西日本凸帯文土器の編年

泉 拓 良

はじめに

弥生土器に基づいて定義された弥生時代が、水田稲作の時代であり、農業社会の時代であると、山内清男氏、森本六爾氏らによって明らかにされたのは、大正時代から昭和初期にかけてであった。それ以来縄文時代は採集狩猟社会（獲得経済）、弥生時代は農耕社会（生産経済）と明確に区分してきた。このような考えと、日本民俗文化の水田稲作農耕起源説とが重なって、弥生時代の成立が日本文化の起源とみなされるようになった。そして、縄文文化は先住民的な文化として、日本の片隅に追いやられてしまったのである。

しかし、昭和五三年から始まった福岡市板付遺跡の一連の発掘調査によって、縄文晩期の終末に編年されていた凸帯文土器の時期に、水田稲作や大陸系磨製石器類、木製農耕具など、弥生時代に特徴的な大陸伝来の要素の出現することが明らかにされた〔山崎80〕。この事実

を北部九州における水田稲作文化、すなわち弥生文化成立期の短期的局地現象と理解するのか、西日本全域すなわち縄文時代の凸帯文土器圏全域で起こった縄文文化の変質の一部とみなすのか、が問題となった。この問題は、一方において、弥生時代と縄文時代との時代区分を、その出发点であった土器によって区分すべきであるという立場の研究者と、その生産様式や社会組織によって時代区分すべきであるとする研究者とのそれぞれと結びつき、複雑な展開をみせているのが現状である。

筆者は、森本六爾氏が言明したように、弥生時代は農業社会が確立した時代と定義する。そして、朝鮮半島からもたらされた水田稲作技術体系が、凸帯文土器期の縄文社会に、地域差をもちつつも、急速かつ広範囲に受容され、縄文社会が変質していった様相を追求することを最終的な目的とする。本稿では、その目的を達成するための前提となる凸帯文土器の編年をおこない、次いで凸帯文土器からみた問題点を整理する。

二 凸帯文土器編年の研究略史

凸帯文土器期の歴史を考える時にまず問題になるのは、その基本となる時間的尺度、すなわち土器編年の確立である。凸帯文土器の編年が進んでいるのは、近畿地方と九州地方である。しかし、両地域の土器編年の相互比較は、外山和夫氏「外山67」、家根祥多氏「家根84」、筆者ら「家根・泉86」の研究があるのみで、かならずしも活発でない。また中間に位置する瀬戸内海地方の資料が不足していたため、概念的な対比に留まらざろうえなかった。しかし、最近、資料の増加がみられるので、再度、この二地方の凸帯文土器編年に検討を加えることにより、西日本全域の編年の大枠を示すことにする。

(一) 九州地方

北部九州において、凸帯文土器編年を確かなものにしたのは、山崎純男氏である〔山崎80〕。福岡市板付遺跡での層位資料をもとに、夜臼Ⅰ式↓夜臼Ⅱa式↓夜臼Ⅱb式（弥生土器の板付Ⅰ式と共伴）の編年案を提示し、その細分の根拠を、壺と深鉢（甕）の形態の差や、底部の製作技法の差、深鉢の口縁下にめぐる凸帯の位置と形状の変化、壺・深鉢・浅鉢（鉢）の器種構成比率の推移に求めた。とくに、凸帯の付く位置と形状については、各型式間の変化が数量的に明白である（表一）。すなわち、夜臼Ⅰ式では凸帯が口縁端より下がるAが七五

表1 各遺跡出土の突帯の分類（山崎80）

遺跡名	突帯の分類			計
	A	B	C	
板付遺跡G-7 a・b調査区下層	18 75%	4 17%	2 8%	24 100.00%
柏田遺跡	21 50%	13 30.95%	8 19.05%	42 100.00%
諸岡遺跡	25 59.52%	8 19.05%	9 21.43%	42 100.00%
板付遺跡G-7 a・b G-6 a, G-25・26トレンチ	7 28%	14 56%	4 16%	25 100.00%
日本考古学協会環濠 (板付)	50 10.31%	135 27.84%	300 61.86%	485 100.01%

%を占め、夜臼Ⅱ式では口縁帯に接して凸帯の付くB・Cが七〇%以上を占めるといふ違いが指定されており、後に家根氏が近畿地方と九州地方の編年関係を論述した際の重要な手掛かりとなった。

その後、佐賀県唐津市菜畑遺跡を発掘した中島直幸氏はその層位的所見をもとに、凸帯に施す指頭圧痕状の刻み目の多用と、浅鉢の器形の違いとから、夜臼Ⅰ式に先行する凸帯文土器として菜畑Ⅱ式（山ノ寺式）を提案した〔中島82〕。さらに、これに先行するものとして、凸帯の付かない深鉢と鍵形口縁の黒色磨研浅鉢からなる、晩期中葉の黒川式の伝統を強く残した土器に、少量の一条の凸帯文土器が伴う上

管生B式〔高橋86〕や長行式〔山口83〕が設定されている。ただし、山崎氏・島津義昭氏はこの長行式を黒川式などと共に晩期前半として扱っており〔山崎・島津81〕、凸帯文土器期を弥生時代とする橋口達也氏〔橋口85〕、田中良之氏〔田中86〕はこの時期までを縄文時代と捉えるなど、九州の研究者はその後の凸帯文土器と区別する見解が多い。

北部九州以外の地域では、熊本県を中心とした西健一郎氏の編年案がある〔西82・85〕。夜臼Ⅱb式までは北部九州ときわめて類似した内容であり、その後独自の展開を示すとしている。

土器編年研究ではないが、北部九州の凸帯文土器の器種構成比率に地域差があることを示した横山浩一氏・藤原慎一郎氏の研究が重要である〔横山・藤尾86〕。菜畑Ⅱ式から夜臼Ⅱ式にかけて、唐津平野において、全器種のなかで浅鉢が五〇―二五%、壺が一―四%を占めるのに対して、福岡平野では浅鉢が八―六%、壺が三七―二五%と、大きな違いを見せているという。すなわち福岡平野の集団が唐津平野と比べて、いちはやく縄文的食器構成から脱したことを示すものと考えられる。

(二) 近畿地方

近畿地方では古くから、凸帯が口縁下にだけ付く一条凸帯文土器から、口縁部と胴部に付く二条凸帯文土器に変化したとされており〔外山67〕、晩期全般の土器編年を確立した滋賀県大津市滋賀里遺跡の層位学的所見もこれを支持していた〔田辺編73〕。しかし、当時二条凸帯文土器の代表とされていた船橋式のタイプサイトである大阪府藤井寺市船橋遺跡〔佐原ほか58〕においては、かえって二条凸帯文土器は少数で、一条凸帯文土器が多数を占めることが、中村友博氏によって問題視されることになり、凸帯が一条か二条かよりも、口縁下の凸帯の位置と形状が、凸帯文土器編年の重要な手掛かりとして注目される

ようになった〔中村77〕。中村氏の研究法は家根氏によって発展され、その後の近畿地方の編年は、口縁部の形成技法、凸帯の位置と形状、刻み目の種類のそれぞれの変化に基づいて行われるようになった〔家根81〕。その中で、大阪市長原遺跡の発掘調査が行われ、家根氏によって、口縁に直接凸帯の付く二条凸帯文土器が大多数を占め、碗形に限られた浅鉢が全器種の約四%にすぎないという内容をもつ長原式が設定され、滋賀里Ⅳ式（一条凸帯文土器）↓船橋式（一条と二条凸帯文土器が混じる）↓長原式（二条凸帯文土器）という編年案が提示された〔家根82〕。以後、松尾信裕氏による長原式の細分案〔松尾83〕や、家根氏による滋賀里Ⅳ式細分の可能性を示した論考〔家根84〕があるが、編年の大枠に変更はなかった。

家根氏および筆者は近畿地方の編年を基にして、九州地方から東海地方に至る主要遺跡から出土した凸帯文土器を分析し、縄文晩期末西日本全域の編年案を発表した〔家根・泉86〕。それは、山崎氏が指摘した夜臼Ⅰ式から同Ⅱ式への凸帯位置の上退現象を、近畿地方の船橋式から長原式への変化の中に見出し、夜臼Ⅰ式が船橋式に、夜臼Ⅱ式が長原式にそれぞれ併行するとしたものであった。この編年案は、九州地方では二条凸帯文土器が主体であり、逆に東海地方では最後まで一条凸帯文土器のままであるということを明らかにした。それまでの凸帯が一条か二条かに依拠した外山氏の編年案が崩壊した後の、斬新な編年体系であった。

しかし家根氏・筆者の編年案にも問題点があった。北九州の夜白II式期では、逆「く」字形口頸部黒色磨研浅鉢が福岡平野でも全器種の約一〇%、唐津平野では約三〇%も占めるのに対して、同時期とした長原式では、黒色磨研浅鉢はすでになく、粗製の椀形浅鉢が四%を占めるにすぎない。したがって、当時九州の中でも一段と脱縄文化が進んでいた福岡平野より、さらに近畿地方のほうが脱縄文化が進行していたということになる。土器以外の要素を考えにいと、このようなことは成り立たないことであり、やはり、長原式の編年位置が古すぎることを示すものとして、凸帯文土器の編年を再考する必要があると思われる。

以上のような九州地方と近畿地方の編年にずれが生じた原因は、九州地方においては、逆「く」字形口頸部黒色磨研浅鉢が主要な浅鉢であった時期を三型式に細分しているのに対して、近畿地方ではそれに当たる時期の良好な資料が未発見ないし未報告のためと思われる。そこで、問題の時期の資料となる、筆者らが昭和六〇年に発掘した兵庫県伊丹市口酒井遺跡第一五次調査出土土器を次章以下で紹介し、新たな編年案を提示する。

三 口酒井遺跡第一五次調査第一五層出土の凸帯文土器

口酒井遺跡は大阪国際空港の南、猪名川の東岸に位置し、弥生時代

の拠点集落として有名な田能遺跡の北約一kmにある。現地表面は標高約7mであり、低地部の遺跡といえる。凸帯文土器の包含層は地下約一五〇—二〇〇cmにあって四層に大別でき、その四層のあいだには、土器の漸移的な変化がみられた。ここで紹介する第十五層は下から二番目の層で、他の三層が青灰色系の細砂ないし粘土であったのに対して、炭化した植物片を多く含んだ黒色の粘質土であって、短期間の堆積によるものと考えられた。

第十五層から出土した土器は、整理箱に三〇箱分あり、そのうち口縁部や頸胸部の境界部分、底部など、なんらかの特徴で識別できた破片は、九三個体分ほどであった(図一—四)。まずその器種の構成比率をみると、深鉢が七〇%、浅鉢が二九%で、壺と断定できるものは出土していない。

深鉢は、口縁部片で六五個体が分類可能であり、そのうち口縁端部に刻み目を有するもの三五個体、口縁端部を面取りするもの二五個体あり、口縁下の凸帯は口縁から平均して五、五mm下に付いており、山崎氏の分類によるAタイプの凸帯〔山崎80〕は大多数を占める。この数値は従来想定されていた滋賀里IV式の内容と一致し、瀬戸内海地方の岡山県倉敷市広江・浜遺跡出土の凸帯文土器〔間壁はか79〕にも類似している。

また、口縁部内面に沈線が一条めぐる深鉢が一一例あり、この特徴は、広江・浜遺跡や奈良県橿原市橿原遺跡などから出土した滋賀里IV

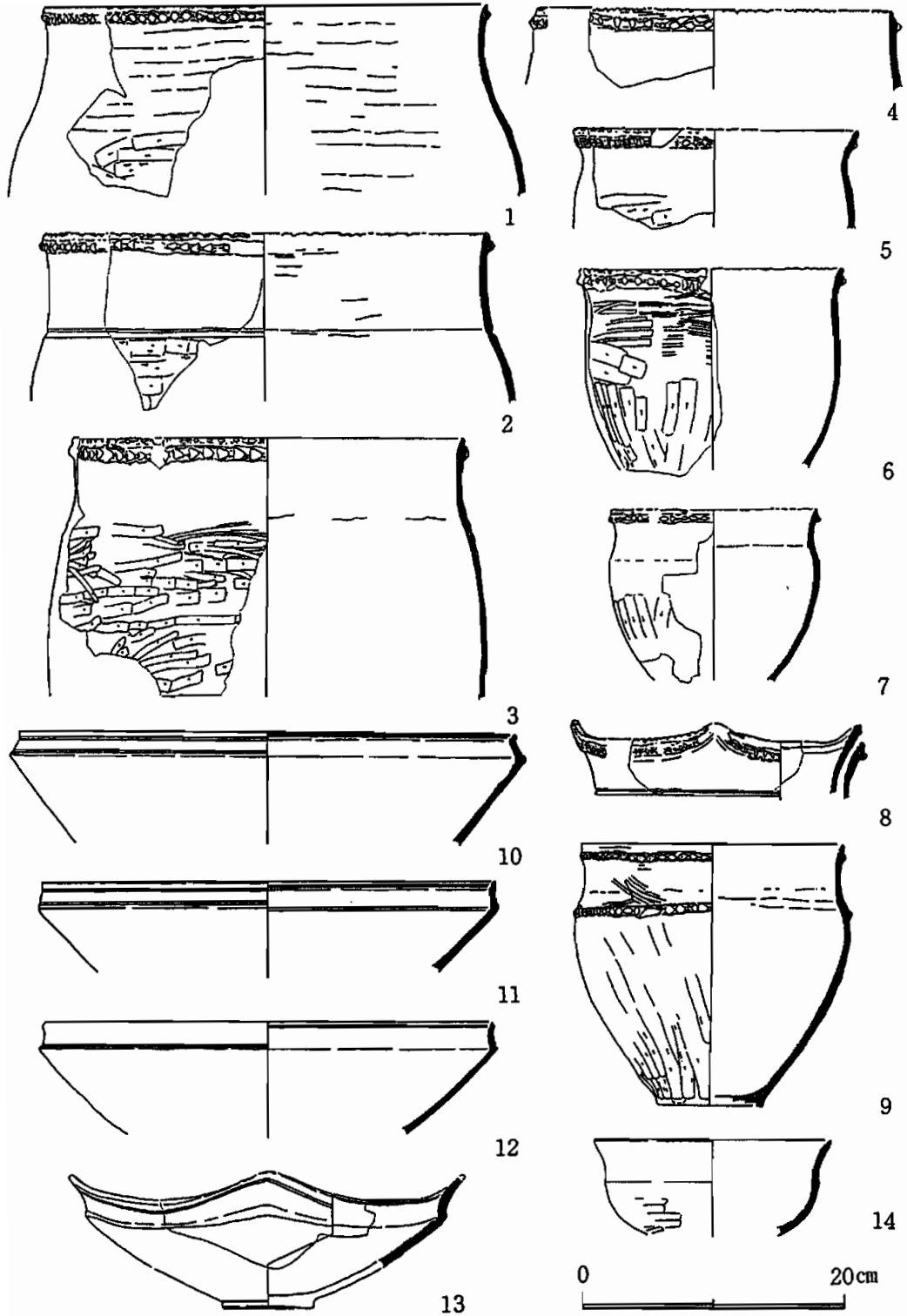


図1 口酒井遺跡第15層出土の土器1 (縮尺5分の1)

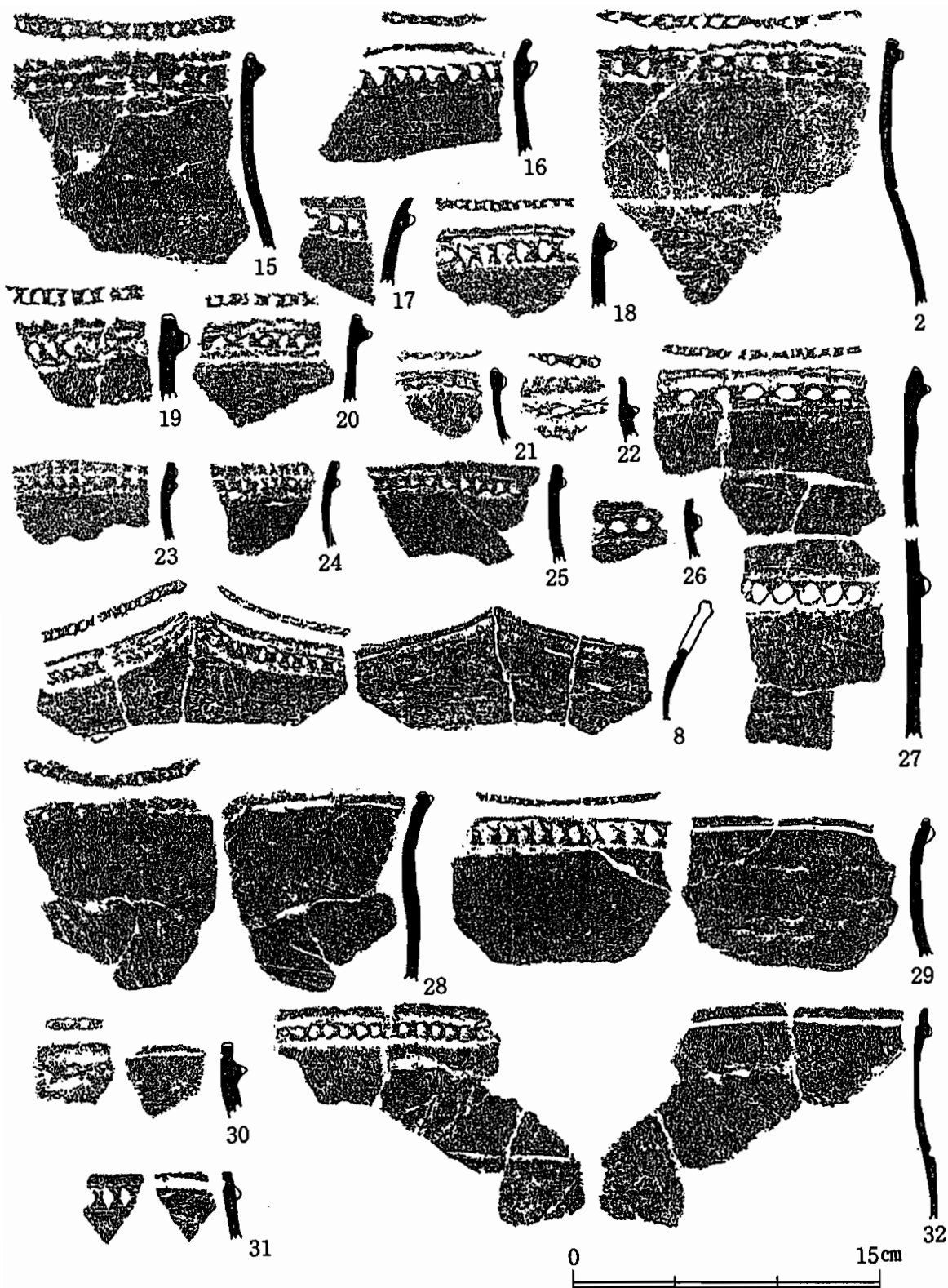


図2 口酒井遺跡第15層出土の土器2 (縮尺3分の1)

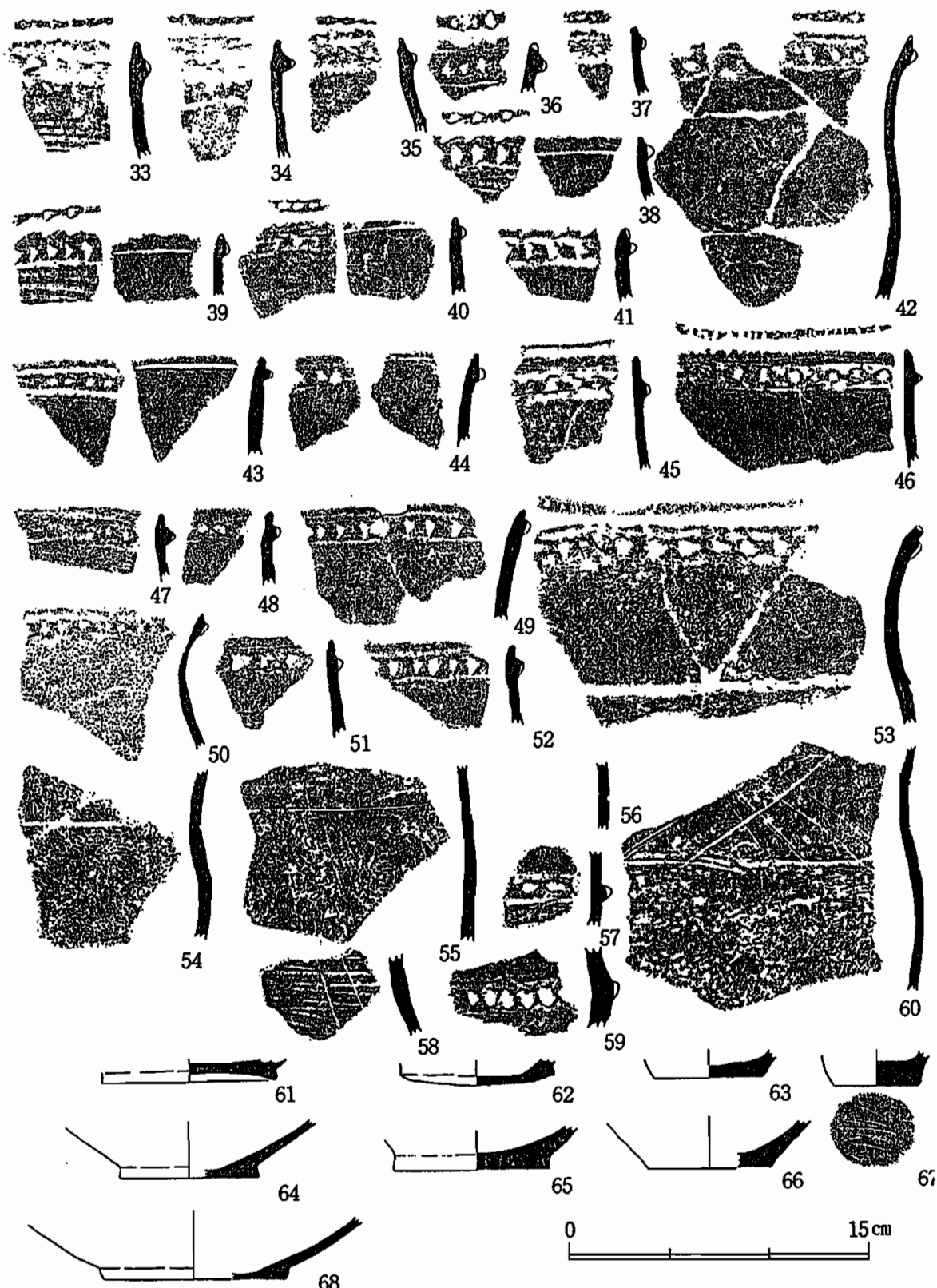


図3 口遺跡第15層出土の土器3 (縮尺3分の1)

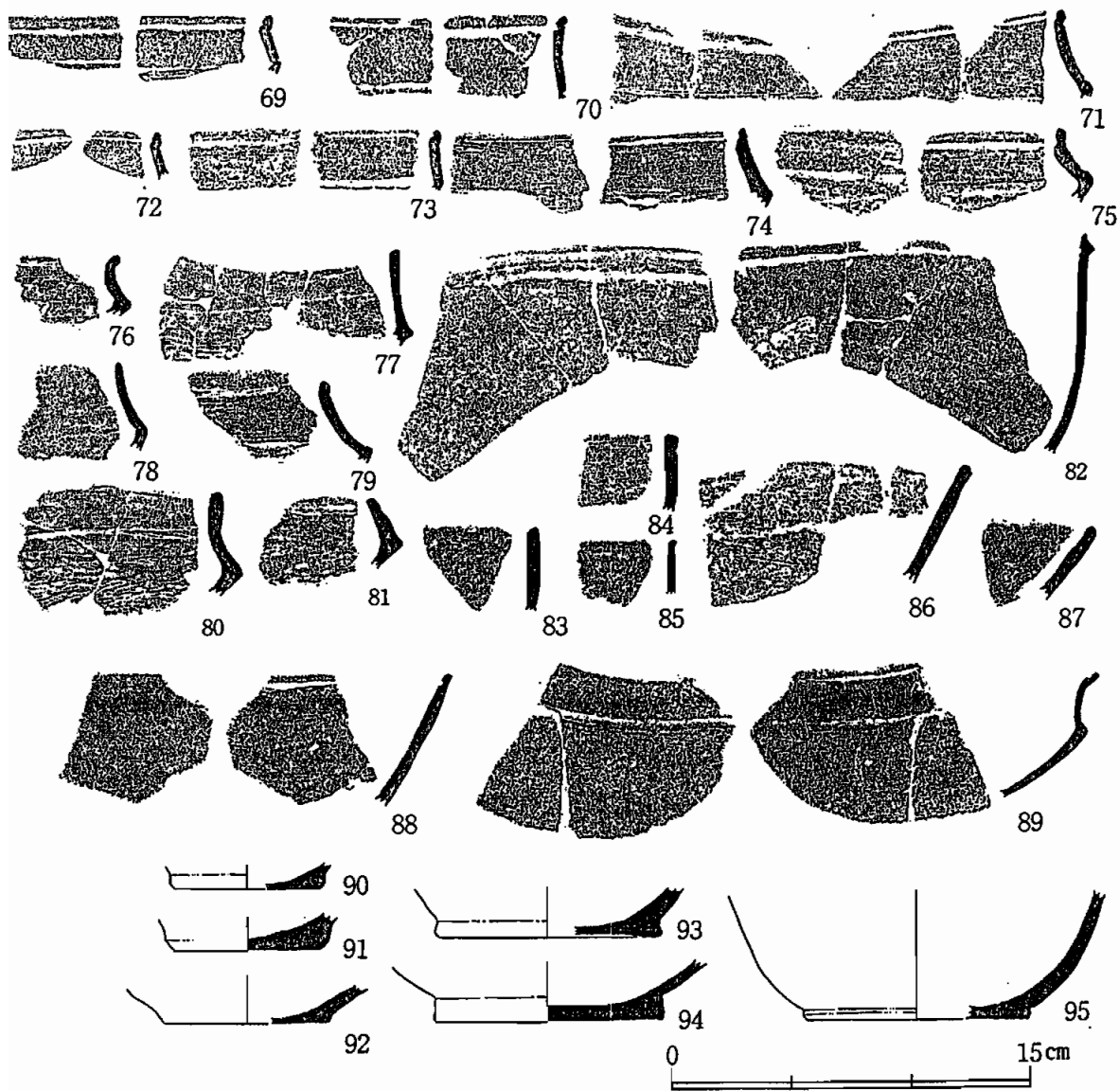


図4 口酒井遺跡第15層出土の土器4 (縮尺3分の1)

式期とされている土器に若干見られ〔末永編61〕、和歌山県白浜町瀬戸遺跡〔中村77・丹羽78〕や三重県鈴鹿市蛇亀遺跡〔新田82〕などの船橋式期とされている土器にも見られる特徴である。頸部と胴部との境は明瞭であり、斜め下から施した一条の沈線がめぐるものが多く、この特徴も滋賀里Ⅳ式と船橋式の両方に見られる特徴である。

底部は、浅鉢と深鉢共に平底もしくはややあべ底状の平底がほとんどで、夜臼式に特徴的とされている外側に張りだした底部を持つものもある。滋賀里Ⅳ式の特徴とされている丸底や尖底は出土していない。それ以外で重要な点は、胴部にも凸帯をもつ二条凸帯文土器が出土していることである。とくに、図二―二七は凸帯の刻み目が指頭圧痕状をているもので、菜畑Ⅱ式に共通する特徴を示している。このほか、二条凸帯文土器のなかに、いわゆる河内の胎土のものがあり、すでにこの時期には二条凸帯文土器が近畿地方において製作され始めていたことがわかる。平底と二条凸帯文土器の少量の存在は、家根氏や筆者らが定義していた船橋式の特徴であり、口縁部は滋賀里Ⅳ式、胴部以下は船橋式という特徴を持った深鉢が、この層から出土した深鉢の典型ということになる。

浅鉢は、口縁部二八個体が分類可能である。このうち、一九個体が逆「く」字形の口頸部をもち、図四―八九は丹塗り磨研、それ以外は黒色磨研の浅鉢である。残り、九個体は碗形ないし皿形を呈する浅鉢で、口縁部に凸帯を有する図四―八二と、内面に沈線がめぐる八八と

は黒色に研磨されているが、他は粗製の浅鉢である。逆「く」字形口頸部浅鉢のうち、口縁が外へ肥厚するか、もしくは口縁下に沈線をもち、さらに屈曲部上と口縁内面とに沈線を施したA形態をとるものが特徴的で約七割りを占める。図四―七六―八一は、口頸部に沈線を持たない逆「く」字形口頸部浅鉢のB形態であり、A形態よりも口頸部の長いものが多い。極端な波状口縁になっているため、上から見ると方形を呈する方形浅鉢（図一―一三）は、四個体が識別できた。

逆「く」字形口頸部黒色磨研浅鉢は、滋賀里遺跡の滋賀里Ⅳ式に例がある。しかし、滋賀里Ⅳ式を多く出土した滋賀里遺跡、橿原遺跡、東大阪市鬼塚遺跡H地点〔福永・阿部84〕に一般的な口縁下に凸帯のつく逆「く」字形口頸部凸帯文浅鉢や、滋賀Ⅲ式の系譜をひく鍵形口頸部浅鉢は、第一五層からは出土していない。一方、より新しい時期の船橋遺跡には、逆「く」字形黒色磨研浅鉢は数点しかなく、浅鉢の主体は碗形浅鉢であって、かつ浅鉢自体がかなり少ないという。

このように、口酒井遺跡第一五層出土の土器は、深鉢、浅鉢とも、従来述べられてきた滋賀里Ⅳ式と船橋式との中間的特徴をもち、逆「く」字形口頸部黒色磨研浅鉢を特徴とする時期として他の型式と峻別できるものと考えた。しかし、この口酒井遺跡第一五層出土土器を一型式と認めると、どちらかという観念的に合成されてきた従来の諸型式の内容を変更する必要が生じる。本章では別の資料を加えて検討をおこなう。

四 近畿地方の凸帯文土器編年

以上のように、一条凸帯から二条凸帯、尖底・丸底から平底・浅鉢の変化等々の異なった要素の変化を一律に考えていた従来の編年は、変更せざるをえないものといえる。特に問題となるのは滋賀里Ⅳ式のステレオタイプ化してしまった概念である。今一度、より一括性の高い資料をもって検討を加える。

この目的にかなう資料としては、鬼塚遺跡H地点下層から出土した土器がある。若干滋賀里Ⅲ式が混じっている可能性も捨てきれないが、ほぼ一括と考えられる。報告書が出版されていないので、一九八四年四月の西日本縄文土器研究会で、福永信雄氏・阿部嗣治氏が発表した研究成果を基にする〔福永・阿部84〕。

深鉢には、滋賀里Ⅲ式と区別不可能の凸帯の付かない深鉢A・B・Fと、一条凸帯文の深鉢C・D・G、一条凸帯文の半精製深鉢Hの各種がある。底部は丸底・尖底が主で、凹底が少し残るが、平底は見られない。浅鉢は、鍵形口頸部で口縁内面に肥厚帯のある浅鉢A・B・F、椀形の浅鉢C、凸帯の付く椀形浅鉢Dの各種がある(図五)。この土器群は口酒井遺跡第一五層の土器と、深鉢の凸帯の位置と形状を除き、異なっており、滋賀里Ⅲ式とは区別の困難な深鉢と浅鉢の存在からみて、凸帯文土器期のもっとも古い時期にあたると考えられる。

次に古くから一条凸帯文土器期の遺跡として著名な檀原遺跡の土器を分析する。奈良県立檀原考古学研究所附属博物館に保管されていた資料中には、二条凸帯文土器はない。一条凸帯文深鉢は、口縁端部を面取りし、そこに刻み目を施したものが多く、凸帯が口縁から下がって付く土器で、鬼塚H地点下層、口酒井遺跡第一五層と類似している。凸帯文期に所属する平底はないことからみて、鬼塚H地点下層により近いと思われる。浅鉢は凸帯の付く浅鉢と、鍵形口頸部の浅鉢が主体であるが、少量ながら逆「く」字形口頸部浅鉢が出土している。たし、逆「く」字形口頸部浅鉢は沈線を持たないB形態であり、胴部に削り調整を残す点や、口頸部が比較的長い点など、口酒井遺跡第一五層出土例とは違い、認められる。

このように、檀原遺跡の土器は鬼塚H地点下層土器にはば併行する土器と言えるのであるが、若干の違いも指摘することができる。それは凸帯の付く浅鉢である。檀原遺跡で主体をしめるのは、凸帯の付く口頸部の長い逆「く」の字形浅鉢であるが、この器形の浅鉢は鬼塚H地点下層では顕著ではなく、かえって中・上層に多く見られるのである。また、この時期の九州地方では、長行遺跡、上管生遺跡などからは逆「く」字形口頸部凸帯文浅鉢はまったく出土せず、その後の菜畑Ⅱ式や夜臼Ⅱ式を主体とする菜畑遺跡、佐賀県唐津市宇木汲田遺跡に凸帯の付く方形台付き浅鉢がみられる〔横山・藤尾86〕。檀原遺跡の土器は、その点で、口酒井遺跡第一五層の土器までは下らないものの、や

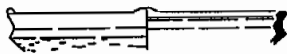


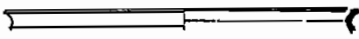
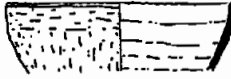

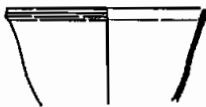

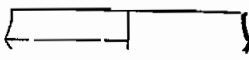


	下 層	上層(溝30を含む)
A		
B		
C		
D		
E		
F		

図5 鬼塚遺跡出土の浅鉢（福永・阿部84を一部改変）

や新しい要素をもっているとも考えられる。

もう一つ、橿原遺跡には重要な土器がある。凸帯文土器の、とくに菜畑Ⅱ式・夜臼Ⅰ式に特徴的とされている波状口縁方形浅鉢の出現を型式学的に追える資料である(図6)。1は鐘形口頸部浅鉢で、緩い波状の口縁を呈し、波頂部に退化した突起が付いている。2になると、口縁部の立ち上がり短くなって、波状もやや目立ってき、3では、それまでの屈曲部に当たるところに凸帯が施されるようになる。したがって、3の口縁内外面の凸帯が、4・5になって、省略されて沈線と化し、波状も極端となって凸帯文の方形浅鉢が成立する。さらに、口縁部の突起が退化消滅し、外面の凸帯も沈線におき代り、口頸部が短くなったのが6の口酒井遺跡出土例である。ちなみに、菜畑遺跡出土のこの種の浅鉢には、退化した突帯の付くものと沈線の付くものが認められる。1の波状口縁鐘形口頸部浅鉢に類似した土器が鹿児島県榎木原遺跡でも出土しており、この種の浅鉢が、凸帯文土器出現期に広い地域で成立した可能性を示している。しかし、先述の型式学的序列が正しいとするならば、屈曲部の凸帯化が認められる近畿地方で成立したと考えられる。そして、波状口縁方形浅鉢は他の浅鉢と同様の変遷を考えることができる。

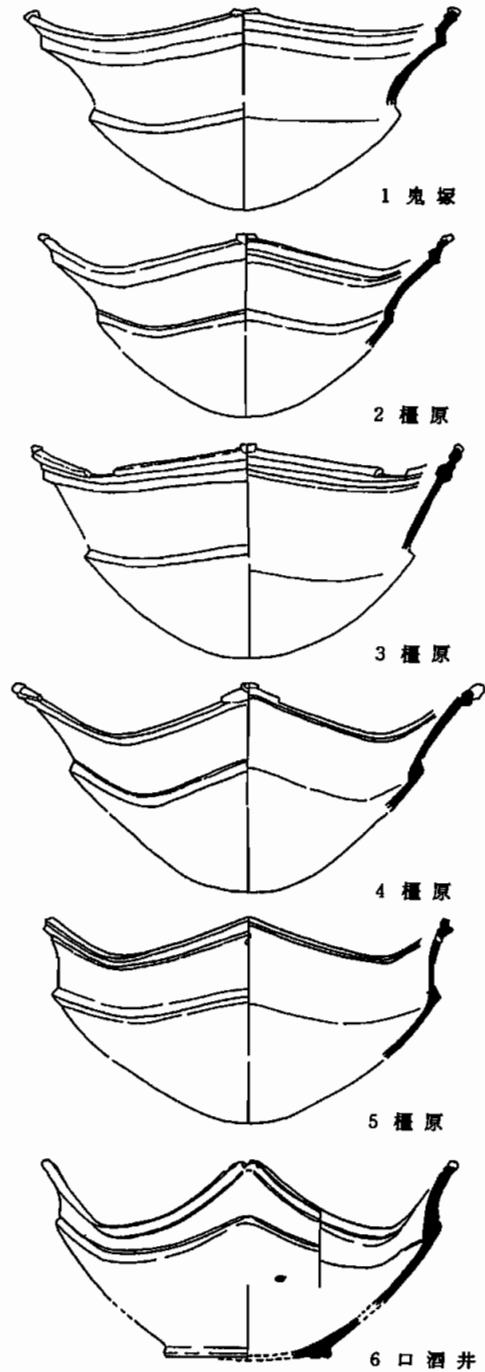


図6 波状口縁方形浅鉢成立模式図(縮尺不同)

口酒井は浅岡85、他は泉のスケッチ

このように、従来滋賀里IV式としてきた土器群は、鬼塚遺跡H地点下層↓榎原遺跡↓口酒井遺跡第一五層という変遷を想定できるが、榎原遺跡と口酒井遺跡第一五層のあいだに、より大きな変化がある。

これまで一条と二条の凸帯文土器が混じる船橋式としてきた土器群は、逆「く」字形口頸部黒色磨研浅鉢を特徴とし壺の認められない口酒井遺跡第一五層土器と、浅鉢の減少や凸帯文壺の出現を典型とする船橋遺跡の土器とに大別できる。しかし両者の間には型式学的にみても飛躍があり、船橋遺跡の磨きが顕著でない凸帯文壺に対して、凸帯のない磨きの顕著な壺があって、逆「く」字形口頸部黒色磨研浅鉢も一定量出土している滋賀県彦根市福満遺跡出土や〔本田82〕、口酒井遺跡一〇次調査出土土器〔浅岡85〕などが、その飛躍部分を埋めるもの

と想定できる。船橋式から長原式への変化は、家根氏の指摘によるように、二条凸帯への統一、口縁部凸帯の口縁端との一体化、浅鉢の急激な減少など、連続的にその変遷を追うことができる。

以上の土器型式をまとめると、鬼塚遺跡H地点下層↓(榎原遺跡)↓口酒井遺跡第一五層↓(福満遺跡・口酒井遺跡第一〇次)↓船橋遺跡↓長原式という変遷が想定できる。これらの諸型式は、浅鉢の種類の変化などから、鍵型口頸部浅鉢と凸帯文浅鉢が特徴的で、丸底・尖底の一条凸帯文深鉢を主体とする凸帯文1期(鬼塚、榎原)、逆「く」字形口頸部黒色磨研浅鉢を特徴とし、平底の一条・二条凸帯文深鉢のある凸帯文2期(口酒井、福満、船橋)、浅鉢がほとんどみられず、二条凸帯文深鉢に統一される凸帯文3期(長原式)に大別でき、他地

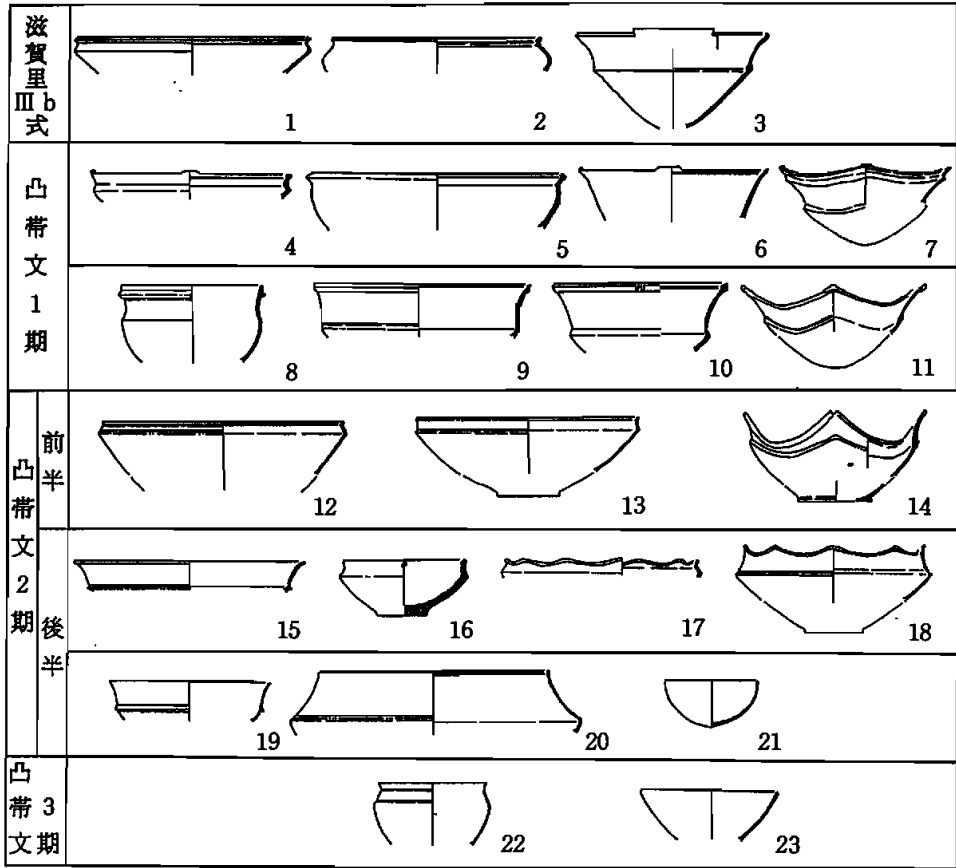


図7 近畿地方凸帯文浅鉢の時期細分（縮尺不同）

1～3兵庫県篠原遺跡、4～6大阪府鬼塚遺跡H地点、7～11奈良県橿原遺跡
12～14、17・18兵庫県口酒井遺跡、15・16滋賀県福満遺跡、19～21大阪府船橋遺跡
22・23大阪府長原遺跡

方との比較を試みるときに都合がよい（図七）。

五 他地方との関係

近畿地方の三期大別、六期細分案は、他の地方ではどのような型式と併行関係になるのか。従来の編年案はそれぞれの地域での細分を目的としていたため、深鉢（甕）の年代差に基づくものが多かった。深鉢は出土量が多くて、年代的・地域的変化がより顕著なため、地域差を識別し、年代差を追求するためには、もっとも適した土器である。しかし、広域での編年にとっては、地域色というノイズを処理しなくてはならず、現状ではその処理に十分な資料が整っていない以上、広域にわたって類似した器種の分布する浅鉢を用いて、西日本全域の凸帯文土器編年を考えることにした（図八・九）。

凸帯文土器が出現する直前には、九州地方から東海地方まで、良く類似した土器が分布している。地方色に富む文様を深鉢に施し、浅鉢は九州系の黒色磨研浅鉢と近畿系の有文浅鉢とを、それぞれの地方の比率で併せ持つそれまでの土器群を一掃し、有文

土器をほとんど排除した土器群が成立した。九州地方では黒川式、瀬戸内海地方では原下層式、近畿地方では滋賀里川式、東海地方では稲荷山式と呼ばれているが、相互に非常によく似た土器である。とくに口縁部内面肥厚形の鍵形口縁黒色磨研浅鉢は西日本で共通の器種となっていた。これらの類似を基盤として凸帯文土器が出現する。

凸帯文Ⅰ期 近畿地方の鬼塚H地点下層出土土器に併行する各地方の出現期の凸帯文土器は、それと同様の直前型式と区別できない鍵形口縁黒色磨研浅鉢と凸帯の付かない深鉢に、一条凸帯文深鉢が加わった内容である。この時期の器種としては、壺がほとんどなく、深鉢が六七%、浅鉢は三三%を占める。この種の土器型式は九州地方では、福岡県北九州市長行遺跡出土の土器（長行式）、大分県竹田市上菅生B遺跡出土の土器（上菅生B式）など東部・北部に分布し、西は目下のところ福岡県筑紫野市阿志岐シメノグチ遺跡・甘木市小田集落遺跡までである。瀬戸内海地方では前池式がこの時期に当たり、東海地方では愛知県新城市大ノ木遺跡出土の西之山式が併行し、分布は全体に東に寄っている。ただし、鍵形口縁黒色磨研浅鉢は共通する要素が多いが、一条凸帯文深鉢と無文深鉢には地方色が認められる。例えば、九州地方では深鉢の口縁端部に刻み目を施すことは稀であり、瀬戸内海地方以东と異なる。

また、近畿地方の檀原遺跡や鬼塚H地点中・上層にある凸帯文浅鉢は、九州地方の長行式、上菅生B式、瀬戸内海地方の前池式、東海地

方の大ノ木遺跡の西之山式には見られない。これを近畿地方の地方色と考えるか、時期差として他の地方に未確認の土器型式が存在すると想定するかが問題となる。東海地方では凸帯文浅鉢が多くみられるのは、次の時期の土器が主として出土した一宮市馬見塚遺跡F地点であり、瀬戸内海地方では一条凸帯文土器を主体とし、前池式よりも後出と考えられている土器の出土している倉敷市広江・浜遺跡にある。九州地方には平縁の浅鉢には凸帯の付くものはないが、先に述べた菜畑Ⅱ式・夜臼式の波状口縁方形浅鉢には若干存在する。以上のように凸帯文浅鉢は近畿地方を中心に東海地方・瀬戸内海地方にみられ、その出現は上述の諸型式よりやや遅れ、瀬戸内海地方では広江・浜遺跡出土凸帯文の時期にあたる可能性が強い。このように考えると、東海地方では、既存の資料の中にこの時期の土器が存在しているということになり、問題はないが、九州地方では、この時期の資料が未発見とするか、波状口縁方形浅鉢にみる凸帯の存在から菜畑Ⅱ式をこの時期に併行させるかが問題となろう。長行式は瀬戸内海地方の強い土器であり、二条凸帯という九州色の強い凸帯文土器である菜畑Ⅱ式とはかなり断絶があると思われる。したがって、将来この時期を埋める資料が発見されるものと考えている。

以上のように、凸帯文Ⅰ期の土器は北部九州から東海地方にまで分布しており、それぞれ近畿地方と同様に二時期に細分できる可能性がある。

凸帯文2期 逆「く」字形口頸部黒色磨研浅鉢を特徴とする時期で、壺が明確に器種として登場する。凸帯文2期は、近畿地方でみたように、波状口縁方形浅鉢の顕著な前半と、それがほとんどみられない後半とに分けることができる。

前半期 前半期を九州地方では菜畑遺跡第九—一二層の土器（菜畑Ⅱ式）で代表するならば、特徴としてあげた波状口縁方形浅鉢以外に、逆「く」字形口頸部黒色磨研浅鉢の口縁端部が外側に肥厚ないし屈曲し、口頸部下に下方向から施文された沈線がめぐる器形（A種）が特徴の一つとなり、深鉢凸帯上の指頭圧痕状刻み目も特徴といえる。指頭圧痕状刻み目は長崎県の山ノ寺式や熊本県の上南部式に多くみられ、これらの地域の凸帯文最古型式の指標とされている。しかし、これらの諸型式には逆「く」字型口頸部黒色磨研浅鉢A種や波状口縁方形浅鉢はなく、浅鉢は口頸部のやや長い逆「く」字形口頸部黒色磨研浅鉢B種が伴うようであり、地域色と捉えるか、若干の時期差と理解するかに問題が残る。そしてこの問題は、夜白Ⅰ式の編年位置と係わっている。夜白Ⅰ式には、波状口縁方形浅鉢が少ないようであり、逆「く」字形口頸部黒色磨研浅鉢A種も極めて少ない。逆「く」字形口頸部黒色磨研浅鉢A種は、先に述べたように兵庫県口酒井遺跡に顕著であり、また、福岡県曲り田遺跡、佐賀県菜畑遺跡にも多く見られる器種であり、この器種が広い範囲に分布していた可能性は強い。さらに、九州地方ではA種浅鉢は確実に後半期に属する夜白Ⅱ式や菜畑遺

跡第八層の土器にはなく、板付遺跡周辺地域を特殊な地域としない限りは、夜白Ⅰ式は菜畑Ⅱ式よりも後出の型式ということになる。ただし、夜白Ⅰ式は壺の形態や、浅鉢B種には明らかに古い要素を持っており、凸帯文2期の前半に収まるものと考えてよい。

瀬戸内海地方ではこの時期の資料は岡山県百間川沢田遺跡高縄手A調査区斜面堆積1・2から出土した土器に含まれているが、それ以外に明確な出土例は知らない。また、近畿地方でも先に述べた口酒井遺跡第一五層出土土器がこの時期に属するが、他にまとまった出土例は無い。東海地方では、馬見塚遺跡F地点出土土器にこの時期の特徴をもつものがあるが、他の時期の土器と明確に分離することはできない。このように、九州地方以外では、現在のところ十分な資料が揃っていないとはいえない状況である。

この時期の器種構成に関しては地域差が認められる。菜畑遺跡第九—一二層では深鉢四三%、壺四%、浅鉢（高杯を含む）五二%であるが、板付遺跡G—7a、7b調査区下層では深鉢五六%、壺三八%、浅鉢七%、口酒井遺跡第一五層では壺は無く、深鉢七〇%、浅鉢二九%であった。菜畑遺跡の浅鉢の比率が以上に高いが、この地域での前後の時期を見た場合、おおよそ三〇%と安定しており、口酒井遺跡とあまり異ならないものと考ええる。そう考えると、板付遺跡下層の浅鉢の比率がかなり低いものになる。これも、調査をした山崎氏によれば、上層の土器やそれ以前の調査の出土例からみて浅鉢は本来一五%ぐらい





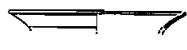
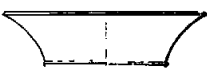




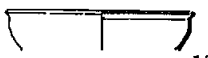



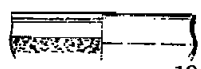
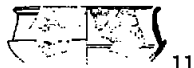


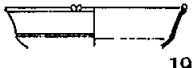






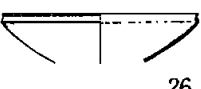
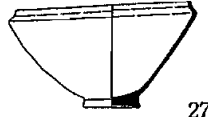

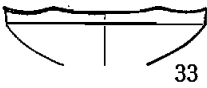




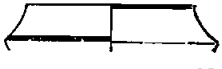






九州地方	瀬戸内地方	近畿地方	東海地方	
 1	 3	 5	 7	滋賀里 III b 期
 2	 4	 6	 8	
 9	 12	 15		1 期
 10	 13	 16	 18	
 11	 14	 17	 19	
 20		 23	 25	2 期前半
 21	 22	 24	 26	
 27		 30	 33	2 期後半
		 31	 34	
 28	 29	 32	 35	
		 36		3 期
		 37	 39	
		 38	 40	

図8 凸帯文土器浅鉢の編年案（縮尺不同：出典は文末）

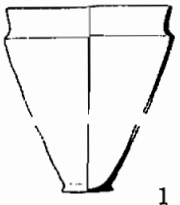
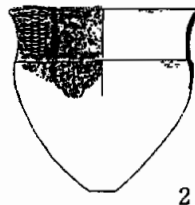
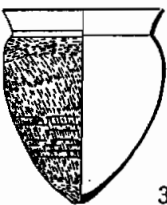
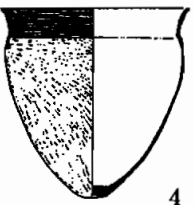
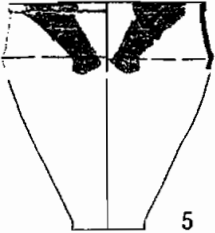
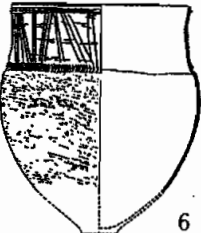
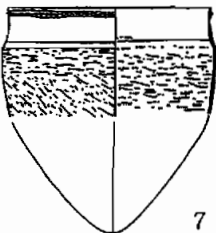
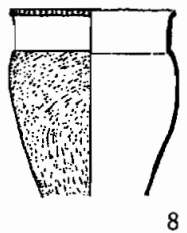
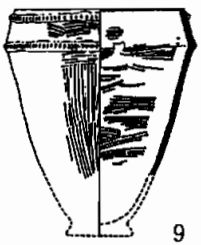
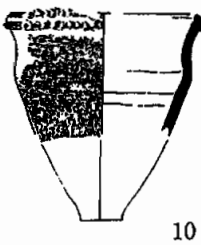
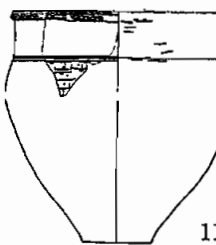
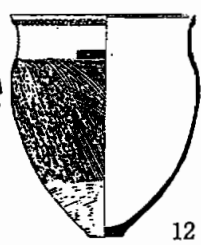
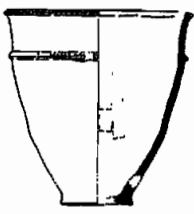
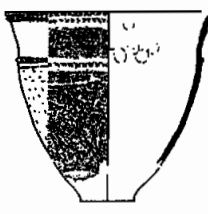
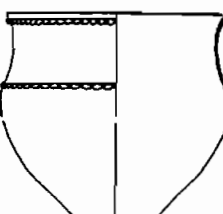
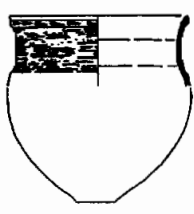
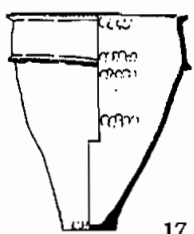

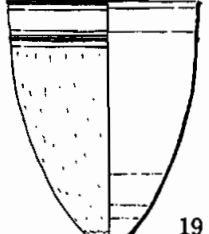
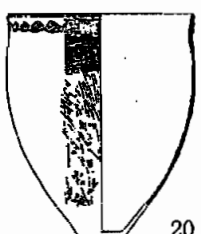
	九州地方	瀬戸内地方	近畿地方	東海地方
滋賀里III b 期	 1	 2	 3	 4
1 期	 5	 6	 7	 8
2 期前半	 9	 10	 11	 12
2 期後半	 13	 14	 15	 16
3 期	 17	 18	 19	 20

図9 凸帯文土器浅鉢の編年案（縮尺不同：出典は文末）

を占めていたものと思われるという。このように、数値を補正しても、板付遺跡下層（夜白Ⅰ式）の特殊性が明かである。また、壺にもその差が顕著であり、板付遺跡は三八%（山崎氏の補正值三〇%）と、菜畑遺跡の四%や同じ唐津平野に位置する宇木汲田遺跡の一・二%に比べて壺が多いといえ、壺という器種をまだ持っていない近畿地方とは大きく異なる。

深鉢にも大きな地方色が認められる。九州地方ではほとんどが口縁部と頸胸部境との二箇所に凸帯を持つ二条凸帯文深鉢であるが、中・四国、近畿、東海地方では凸帯文Ⅰ期の特徴を残し、口縁部のみの一条凸帯文深鉢が主体を占める。また、口縁端部に刻みのない九州地方と刻みをもつ他の地方という差もある。さらに、九州地方の二条凸帯文深鉢の中でも若干の地域差が在るようで、例えば熊本県の深鉢は口頸部が内側に屈曲した器形を呈するのに対して、北部九州では外反りした口頸部をもつ近畿・瀬戸内地方と共通した器形が多くを占める。しかし、口縁部の凸帯が口縁端部から少し下がった所に付くという、凸帯文の分布域全域に共通する要素も認められる。

後半期 波状口縁方形浅鉢の消滅と、逆「く」字形口頸部黒色磨研浅鉢A種の極端な減少、口縁部凸帯の上方への移動等の特徴とし、前半期と区別できる。北部九州地方では波状を呈する浅鉢、逆「く」字形口頸部黒色磨研浅鉢A種は無くなり、口縁直下に凸帯のつく深鉢が深鉢全体の五〇%近くを占める。この時期のある一点で板付Ⅰ式が

成立し、それ以前を夜白Ⅱa式、板付Ⅰ式と共伴するものを夜白Ⅱb式と区別しているが、山崎氏が述べているように、その形態的区別は明確でなく、量的な変化に留まるようである。熊本県では、斎藤山Ⅰ式をこの時期に当てているが、やや後出の可能性をもつ。この時期の器種構成は、板付Ⅰ式を除いた凸帯文系土器で見ると、九州地方においては前半期の地域差が踏襲されており、唐津平野では深鉢約六〇%、浅鉢（高杯を含む）約三〇%、壺約一〇%に対し、福岡平野部では深鉢約六六%、浅鉢約八%、壺二六%である。

瀬戸内地方のこの時期の土器は、岡山県百間川・沢田遺跡土器溜13・14で代表される。この時期に至って壺が出現する。深鉢では二条凸帯と一条凸帯がほぼ半々であり、口縁端部の刻みはほとんど見られない。浅鉢では、逆「く」字形口頸部黒色磨研浅鉢が減少し、かつ、その器形に、口頸部が長くなるという特徴が見られ、また、碗形・皿形の浅鉢は増加するようで、とくに、口縁内面に二条の沈線をもつ碗形浅鉢も重要である。浮線網状文浅鉢の共伴と併せこの時期に東の地域の土器が流入すると思定できる。器種構成比は不明であるが、浅鉢は前半期と比べてかなり少ないと予想される。このように、浅鉢には九州離れが認められるのであるが、近畿地方の所で述べるように、これが夜白Ⅱa式併行の時期に起こったことには躊躇がある。

近畿地方に於いて、百間川・沢田遺跡土器溜13・14と類似した資料が船橋遺跡出土の船橋式である。二条と一条凸帯文深鉢の共存と、口

頸部の長い黒色磨研浅鉢の類似、壺の出現などが証明となる。このような併行関係が認められるとしたら、前章で述べたように、より夜臼式に類似した、船橋式より古い福満遺跡出土土器が、凸帯文土器2期後半の古相に存在することになり、瀬戸内海地方の空白が推定できる。福満遺跡の土器では、深鉢は二条と一条凸帯がともにあり、口縁端部の刻みはほとんどなく、壺としては黒色磨研の小型壺が特徴的で、船橋式に特徴的な凸帯文壺はなく、また、逆「く」字形口頸部黒色磨去浅鉢も前半期と同じ比率で存在するようである。

福満遺跡と同様な土器は東海地方では一般的に存在する。その代表的な遺跡は馬見塚遺跡F地点、愛知県五貫森遺跡であるが、両遺跡とも前後の土器型式の混じりがある。また、主体となる土器型式に差があり、逆「く」字形口頸部黒色磨研浅鉢が顕著に認められる馬見塚遺跡F地点は福満遺跡により類似し、五貫森遺跡出土土器には、内面沈線の碗形浅鉢、浮線網状文土器、凸帯文壺の存在や、逆「く」字形口頸部黒色磨研浅鉢がほとんどないこと、など百間川・沢田遺跡、船橋遺跡に通じる特徴を持っている。しかし、両時期とも深鉢は原則として一条凸帯文土器であり、この点で近畿方と東海地方の違いが認められる。

以上のように凸帯文2期は全西日本的に共通の土器群が分布するようになった時期であり、その源となった地域は九州地方と考えられる。しかし、壺のようにその波及が遅れた器種があったり、二条凸帯文の

ように従来の伝統に妨げられた文様もあって、地方色が生じている。二条凸帯文は、直接的証拠は無いが、山陰地方や、四国地方にはあまり採用れなかったようであり、後に述べるように遠賀川式土器の受容のあり方が近畿、瀬戸内海地方と異なると考えられる。2期後半の新相とした船橋式にはそれまでの動向と異なって、脱九州化の兆しがあり、また、器種構成比では急激な浅鉢の減少がみとめられ、単純に夜臼II b式併行とは言えない。

凸帯文3期 近畿地方の長原式に見るように、黒色磨研浅鉢は勿論のこと、浅鉢がほとんど無くなる時期である。この意味において、縄文土器的器種構成の終末の時期である。近畿地方以西においては、北部九州地方、瀬戸内海地方ではこの時期の土器は現在確認されていない。熊本県では、斎藤山II式ないしその直後の型式、高知県では、田村遺跡出土の凸帯文土器、島根県西川津遺跡、タテチヨウ遺跡出土の凸帯文土器、鳥取県長瀬高浜遺跡出土の凸帯文土器などがこの時期に属すると思われる。このうち、熊本県においては二条凸帯文深鉢（甕）と壺とが主要な器種であり、凸帯文土器から直接弥生土器を辿ることのできるこの地方では、どの時期から弥生土器とするかは困難である。

四国南部、山陰地方においては、一条凸帯文甕（深鉢）が弥生土器（遠賀川式土器）に伴って出土している。その器形は、凸帯文1・2期の深鉢に典型的に見られる頸胴部の屈曲のある形態とは異なり、弥

生土器の甕に通じるずん胴な器形が主体を占めている。田村遺跡例では、その粘土紐外傾接合という成形技法や、刷毛目調整という土器製作技法は弥生土器のそれをを用いており、凸帯文の使用ということ以外では、弥生土器の影響を見過ごすことはできない。長瀬高浜遺跡例にも、刷毛目調整例があり、同様な影響を想定することができる。ここで問題となるのは、両地域の一条凸帯文甕の出自である。想定できるケースとしては、①一条凸帯文甕が他の地域、例えば北九州市周辺、において弥生土器と複合し、その複合体が、両地域に波及したと考える場合、②それぞれの地域において二条凸帯文深鉢が弥生土器の影響をうけて一条凸帯文甕に変化したとする場合、③それぞれの地域において一条凸帯文深鉢が一条から二条へとという変化を経ずに、直接一条凸帯文甕に形態的变化したと考える場合がある。①の場合は、現在発見されているその地域の弥生土器・凸帯文土器共伴例はすべて二条のものであり成り立ち得ないと考えられる。②の場合には、この時期までもう少し二条凸帯が残ってもよいように思われるし、現在のところ山陰地方、南四国地方には二条凸帯文土器が極めて少ないことからみて、やはり成り立ちにくい仮説と思われる。もし③のケースが正しいとするならば、近畿地方でも二条凸帯文が一般化する凸帯文3期長原式より古い土器から生じたと考えられ、弥生土器の波及に関しては近畿地方が遅れることを示している。

田村遺跡で一条凸帯文甕に伴う弥生土器は、板付Ⅰ式から同Ⅱ式a

にかけてのものであるといわれており、この土器と同様の弥生土器の出土した岡山県津島南池遺跡では、ほとんど凸帯文土器を伴っていない点は、瀬戸内海地方とその周辺との弥生土器の伝播様式を考える上で重要な手掛かりとなる。そして、目下のところ凸帯文3期の土器は瀬戸内海地方からは出土していないのである。

近畿地方の凸帯文土器3期は長原式で代表され、二条の凸帯文土器が主体となり、浅鉢が全体の4%と極端に少なくなる。浅鉢は口頸部に屈曲のみられない椀・皿形が主で、それに東日本系の浮線網状文浅鉢が少量伴うことが一般的である。この時期に弥生土器が伴うのか否かについては議論のあるところである。これは、近畿地方最古の弥生土器を決定し、それに伴う凸帯文土器がいかなる段階のものかを見極める手続が必要であると考える。近畿地方の弥生研究者の中には、型式学的検討なしに同じ遺跡や層位からの出土を一括資料と評価するむきもあるように思われる。近畿地方の中にも、深鉢の口縁部形態でみると地域色があり、口縁直下に凸帯のつく長原式は河内・摂津の南半、和泉を中心にし、紀伊南部には口縁から下がった位置に省略型の凸帯のつく瀬戸型の二条凸帯文土器が分布し、河内・摂津北半以西には長原式を一定程度含み、かつ影響を受けながらも船橋式の二条凸帯文深鉢の特徴を残す土器群が分布するようである。このように3期に至って細かな地域色が出現するのは、縄文時代の情報システムが解体し始めたことを示すものと理解している。

当然、その解体の原因は、弥生文化の近畿地方への流入であろう。

この時期の土器に伴って弥生土器が出土した例、弥生土器に伴って凸帯文土器が出土した例が数多くある。しかし、それらの資料は一括資料とは言い難いものを含んでおり、その型式学的検討を行う必要がある。詳細な検討は別稿で述べることにするが、2期に遡る確実な共伴例はなく、和歌山県太田黒田遺跡、瀬戸遺跡例から、弥生土器畿内第Ⅰ様式古・中段階と和歌山県南部3期凸帯文土器の同時性は証明でき、また、鬼虎川・水走遺跡の貝塚状の包含層出土遺物からみて、現状において最も古相の弥生土器と長原式が時間的にきわめて近い関係にあることが予想できる。また、畿内第Ⅰ様式中段階の代表的遺跡である山賀遺跡からは凸帯文土器はなく、かつ、この時期には紀伊産の甕がこの地まで持ち込まれていることを併せ考えれば、中段階には、畿内弥生社会が成立したものと考えられるのであり、この時期には、3期凸帯文土器は紀伊南半にのみ残存するようになったと考えられる。

東海地方の3期の土器は、一条凸帯文深鉢と浮線網状文系の浅鉢（鉢形土器を含む）、壺からなり、黒色磨研浅鉢はまったくみられない。また、長原式に多くみられる皿形の浅鉢もなく、近畿地方との関係も疎遠になったと考えられる。東海地方においては数型式の展開が考えられており、その後半期に弥生土器との共伴例が認められている。濃尾平野以東では、この時期の凸帯文土器をベースにして条痕文土器と称される東日本型の弥生土器が成立する。東海地方の編年と近畿地

方、東日本との編年関係については増子康真が詳しく述べている。

まとめ

以上のように、九州方から東海地方までの凸帯文土器を新たに想定した。新編年案は凸帯文土器の広域編年の枠組みを目指したものであり、従来の編年案と比べて、近畿地方の長原式を一型式遅らせる結果となった。すなわち、中国・四国地方が近畿地方より早く弥生土器（遠賀川式系土器）を認める。また、二条凸帯文土器深鉢は九州地方から瀬戸内海を経て近畿地方に及んだもので、その周辺、山陰地方と四国地方南東部・東海地方にはその影響が少なかったことを明らかにした。このことは、遠賀川式系土器と二条凸帯文土器の波及には大きな違いが在るということを示すものである。稲作の波及と、本格的農耕文化の波及とに、質的な差があるように思われる。

本稿は日本考古学協会昭和六一年度大会の発表をまとめたものである。その後多くのすぐれた研究が発表されたが、本稿の主旨により、あえてふれなかった。口酒井遺跡の調査及び遺物の実測については、浅岡俊夫、野口哲也、山岸洋一、佐々木美和、丸山雄二氏らにお世話になった。記して感謝します。

〔引用文献〕

報告書—1— 鳥根県教育委員会

浅岡 俊夫 一九八五年 「口酒井遺跡（第一〇次調査）」 『兵庫県

埋蔵文化財調査年報』昭和五十七年度

泉 拓良 一九八六年 「縄文と弥生の間に」 『歴史手帖』一四卷

四号

一九八六年 「縄文晩期から弥生時代—西日本における

研究の現状と課題—」 『日本考古学協会昭和

六一年度大会研究発表要旨』

泉拓良・花谷浩 一九八四年 「和歌山県瀬戸遺跡の第四・五次発掘

調査」 『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭

和五十七年度

井藤 暁子 一九八三年 「近畿」 『弥生土器Ⅰ』ニューサイエンス

社

今宿丁田遺跡発掘調査団 一九八一年 「姫路市今宿丁田遺跡出土遺

物について」 『第9回埋蔵文化財研究会資料』

岩野見司ほか 一九七〇年 「馬見塚遺跡」 『新編—宮市史 資料編

Ⅰ』

上村 佳典 一九八四年 『春日台遺跡』、北九州市教育文化事業団

埋蔵文化財調査室

卜部 吉博 一九七九年 「縄文式土器」 『タテチヨウ遺跡発掘調査

岡本 健次 一九八三年 「四国」 『弥生土器Ⅰ』、ニュー・サイエ

ンス社

一九六一年 「高知県入田遺跡」 『日本農耕文化の生成』、

東京堂出版

岡山県教育委員会 一九八五年 「百間川沢田遺跡2」 『岡山県埋蔵

文化財発掘調査報告』五九

賀川光夫・羽田野一郎 一九六〇 『大分県大野郡朝池町田村遺跡調

査報告』朝池町教育委員会

川原 和人 一九八四年 「鳥根県における縄文晩期凸帯文土器の一

試考」 『鳥根考古学会誌』第一集

高知県教育委員会 一九八六年 『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵

文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第一—

三分冊

神戸市教育委員会 一九八六年 「宇治川南遺跡」 『昭和五八年度

神戸市埋蔵文化財年報』

堺市教育委員会 一九八三年 『鈴の宮遺跡Ⅲ』 『堺市文化財調査報

告』第一集

佐原眞ほか 一九五八年 『船橋Ⅱ』

潮見浩・近藤義郎 一九五六年 「岡山県山陽町南方前池遺跡」 『私

たちの考古学』七

- 末永雅雄編 一九六一年 『橿原』、奈良県教育委員会
- 杉原荘介・外山和夫 一九六三年 「豊川下流域における縄文時代晩期の遺跡」『考古学集刊』第二卷第三号
- 高橋 徹 一九八六年 「上管生B遺跡」『菅生台地と周辺の遺跡』X、竹田市教委
- 田中 良之 一九八六年 「縄文土器と弥生土器 西日本」『弥生文化の研究』三、弥生土器Ⅰ、雄山閣
- 田辺昭三編 一九七三年 『湖西線関係遺跡調査報告書』
- 鳥取県教育文化財団 一九八一年 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
一九八三年 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
一九八三年 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
- 外山 和夫 一九六七年 「西日本における縄文文化終末の時期」『物質文化』九
- 中島 直幸 一九八二年 『縄文時代晩期後半—弥生時代の遺物』『菜畑遺跡』、唐津市教育委員会
- 中村 友博 一九七七年 「縄文時代晩期後半—弥生時代の遺物」『菜畑遺跡』唐津市教育委員会
- 中村 友博 一九七七年 「和歌山県瀬戸遺跡の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和五十一年度
- 西 健一郎 一九八二年 「斎藤山遺跡出土刻目凸帯文土器の再検討」『九州文化史研究所紀要』第二七号
- 一九八三年 「下江津湖湖底遺跡出土刻目凸帯文土器の検討(一)」『九州文化史研究所紀要』第二八号
- 一九八五年 一九八五年 「下江津湖湖底遺跡出土刻目凸帯文土器の検討(二)」『九州文化史研究所紀要』第三〇号
- 西口陽一・上西美佐子ほか 一九八三年 『山賀(その3)』、大阪文化財センター
- 新田 洋 一九八二年 「一志郡磨野町蛇亀橋遺跡」『三重県埋蔵文化財調査報告』五八
- 橋口 達也 一九八五年 「日本における稲作の開始と発展」『石崎曲り田遺跡Ⅲ』、福岡県教育委員会
- 東奈良遺跡調査会 一九八一年 『東奈良遺跡発掘調査概要Ⅱ』
- 福永信雄・阿部嗣治 一九八四年 『東大阪市における刻み目凸帯文土器について』西日本縄文文化研究会発表レジュメ
- 藤田 憲司 一九八二年 「中部瀬戸内の前期弥生土器の様相」『倉敷考古館研究集報』第一七号
- 本田 修平 一九八二年 『福満遺跡』『彦根市埋蔵文化財査報告』第四集

間壁忠彦・間壁霞子・藤田憲司・小野一臣「広江・浜遺跡」『倉敷考

古館研究集報』第一四号

増子 康真 一九六五年 「尾張平野における縄文晩期後半期の編年

的研究」『古代学研究』第四〇号

一九六七年 「三河新城市大宮町大ノ木遺跡縄文晩期中

葉（西之山式）土器について」『信濃』第一

九卷四号

松尾 信裕 一九八三年 「長原式土器深鉢A類にみる器形の変化」

「縄文時代晩期から弥生時代」『長原遺跡発

掘調査報告書』Ⅲ、大阪市文化財協会

宮成 良佐 一九七八年 「湖北地方の縄文時代遺跡」『滋賀文化財

より』No.一九、滋賀県文化財保護協会

森浩一・白石太一郎 一九六九年 「南近畿における前・中期弥生式

土器の様相」『考古学ジャーナル』三三三

森 貞次郎 一九六一年 「宮崎県檉遺跡」『日本農耕文化の生成』、

東京堂出版

森貞次郎・岡崎敬 一九六一年 「福岡県板付遺跡」『日本農耕文化

の生成』

家根 祥多 一九八一年 「晩期の土器 近畿地方の土器」『縄文文

化の研究』四、縄文土器Ⅱ、雄山閣

一九八二年 「縄文土器」『長原遺跡発掘調査報告書Ⅱ』、

大阪市文化財協会

一九八四年 「縄文土器と弥生土器へ」『縄文から弥生

へ』、帝塚山考古学研究所

家根祥多・泉拓良 一九八六年 「縄文時代の終末」『日本歴史地図

原始・古代編（上）』柏書房

山口 信義 一九八三年 「縄文時代の遺構と遺物」『長行遺跡』、

北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室

山崎 純男 一九八〇年 弥生文化成立期における土器の編年的研究」

『鏡山猛先生古希記念 古文化論攻』

一九八四年 「稲作の開始」『縄文から弥生へ』、帝塚

山考古学研究所

山崎純男・島津義昭 一九八一年 「晩期の土器 九州の土器」『縄

文文化の研究』四、縄文土器Ⅱ、雄山閣

山中 章編 一九八三年 「長岡京跡左京八二次―左京Ⅱ条三坊一町・

鶏冠井遺跡第二次―発掘調査概要」『向日市

埋蔵文化財調査報告書第一〇集』

弥生式土器研究会 一九八四年 『長崎県の弥生時代初頭前後の土器

の検討』

横山浩一・藤尾慎一郎 一九八六年 「宇木汲田遺跡一九八四年度調

査出土の土器について」九州文化史研究所紀

要』第31号

〔図版引用文献〕

- 龍野市教育文化財団 一九八五年 『片吹遺跡』
- 鳥取県教育文化財団 一九八三年 長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅵ
- 兵庫県教育委員会 一九八八年 『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和六〇年度』
- 福岡県教育委員会 一九八五年 『石崎曲り田遺跡―Ⅲ―』
- 藤尾慎一郎 一九八七年 「稲作受容期の甕形土器研究」 『東アジアの考古と歴史 中』
- 八幡 一郎ほか監修 一九六九年 『新版 考古学講座三 先史文化』
- 大阪市文化財協会 一九八二年 『長原遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 一九八三年 『長原遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
- 大参 義一 一九七二年 「縄文式土器から弥生式土器へ」 『名古屋大学文学部研究論集（史学）』 LVI
- 岡山県高鳥遺跡調査委員会 一九五六年 『岡山県笠岡市遺跡調査報告書』
- 岡山県文化財保護協会 一九七六年 『中国縦貫自動車建設の伴う発掘調査七』
- 一九八五年 旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅵ
- 唐津市教育委員会 一九八二年 『菜畑遺跡』
- 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 一九八三年 『長行遺跡』
- 紅村弘・増子康真・山口克 一九八一年 『東海先史文化の諸段階本文・補足改訂版』
- 湖西線関係遺跡発掘調査団 一九七三年 『湖西線関係遺跡調査報告書』
- 杉原莊介・外山和夫 一九六三年 「豊川下流域における縄文時代晚期の遺跡」 『考古学集刊』 第二卷三号
- 竹田市教育委員会 一九八五年 『菅生台地と周辺の遺跡』